

氏名	吉 岡 章		
学位の種類	医 学 博 士		
学位授与番号	乙 第 6 8 5 号		
学位授与の日付	昭和 50 年 6 月 30 日		
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)		
学位論文題目	腎保存, 保存腎の <b>viability</b> 判定について		
論文審査委員	教授 田中早苗	教授 新島端夫	教授 小川勝士

#### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

腎移植は広く臨床にとりいれられているが、未解決の問題も多い。腎保存についても保存腎の **viability** を判定し、移植後の機能を推定する方法は確立されていない。犬腎を用いて保存腎の **viability** 判定法について組織学的、酵素学的検索をおこなった。

組織学的には保存にともなう腎の傷害の程度は推定しうるものの、電顕レベルにおいても細胞の生と死の間に一線を画するまでにはいたらず、**viability** 判定の指標とはなりえないと思われる。基底膜の変化よりもリソゾームの変形腫大が先行するように観察され、リソゾーム酵素との関連に将来の研究の方向が向けられていることを示唆した。

テトラゾリウム塩還元試験は迅速簡便におこなえる方法として有意義であるが、判定が主観的な点に疑問が残る。

保存により腎静脈血中、灌流液中に lactic dehydrogenase (LDH), leucine aminopeptidase (LAP) の逸脱が認められ、また保存条件、保存時間によってその逸脱の程度がことなり保存腎の **viability** をよく反映していると思われる。保存後の灌流液および移植時の腎静脈血中の LDH, LAP を測定することにより保存腎の **viability** を判定し、移植後の腎機能を推定できると考える。

保存液の組成について、灌流液中の LDH, LAP を測定する方法を用いて pH 調整の必要性、ステロイド、リドカインの有用性を確認した。

#### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は移植に用いる保存腎の **viability** の判定に関する実験的研究で、従来確立されていなかった保存腎の **viability** の判定法について重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。